

女性が職業選択時において「地理的条件のよさ」を重視する構造

- エコロジカルな現実を明かす動機の話彙から -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
大塚 由枝

本研究は、新卒2年以内のファースト・キャリアを歩き始めた女性の地理的条件に関する口述から地理的条件生成プロセスを記述すること、そしてそのプロセスを構成する語彙を現在適応している環境の産物として捉え、対象とした世代の時事性を含んだ普遍性はないか、また世代を超えた共通項があるのならば、それらを説明することができないかというテーマに基づいて行ったものである。

研究のねらいは、働き方や職種といった既存の区分から離れ「地理的条件」という独自のテーマへ着目することによって、わが国における20代前半女性の圧倒的大多数の平凡かつローカルな行動ともいえる職業選択と、彼女たちの人生形成の現実をまったく新たな視点から描写することであった。なお、方法にはインタビュー調査を用い、データを分析する方法として修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを利用した。

調査結果から、女性が職業選択時に「地理的条件のよさ」を考えるのは、自分を守るためであるということ、そのために繋がりを重視し既に自身との繋がりが存在する場を選ぶからだということ明らかになった。彼女たちのこれまでの人生の中で適応してきた気の置けない人物や場という環境世界の中で生きることが、彼女たちにとっての最適選択行動だということである。

また、地理的条件を重視するか否かについては性差が存在するが、しかし女性の中での一般職・総合職という働き方による「勤務地条件のよさ」の選択方法に差がなかったのは、女性は出産を決意した際に働き方を再度選択しなければならない現状があり、この再選択を受け入れることが女性にとって最も負担の少ない生き方であると感じているからである。また生殖機能に関わる生物学的な戦略として社会参加に消極的となるのではなかろうかという考察もできよう。同時に女性の職業選択における地理的条件の重視は、当人らの結婚観と出産・子育てのスケジュールが根底にあるのみならず、その裏側には男性の婚姻戦略が隠れているのである。これは女性のみによって選ばれた選択肢ではなく、この選択を行うことで相乗効果を生むであろう男性との協同戦略なのである。

この現実とは、言い換えれば当人らにとっての「エコロジカルな現実」である。家族や友人、そしてこれまでに適応してきた場という環境世界と自己との相互関係で成り立つ彼女たちの選択は、同時に男性の婚姻戦略との共存関係も保つ。彼女たちに語られる望ましい現実とは、素朴でありながら誰にも悪影響を及ぼさないシステムなのであるということが明らかとなった。